

「よしなしごと」の『遊仙窟』と『よしなしごと』

——『遊仙窟』との比較から

魏 冰 冰

一 はじめに

『堤中納言物語』の「よしなしごと」は同書所収の他物語とは異なり、「物尽くし」の消息文を主たる内容とする作品である。消息文の自身は「師」僧による弟子の女（人のかしづく娘）への物品の無心であり、そこには物の名（言葉）が徹底的な対比構造をもって過剰に集積されている。そうしたことから、本作品は往来物の系譜にあるものとされ、先行研究においてはその一つ一つの言葉の考察を通じて成立が論じられてきた¹⁾。

確かに、寺本直彦氏が詳細に検討されたとおり、「よしなしごと」の消息文に認められる「侍る」の使用、「御かへりはうらによ」「ゆめゆめ」（決して決して、この手紙を他人に見せるな）という往来物的な末尾表現等の語句の使用、事物・名称の列挙、物尽くしという性格、教化の役割などからは、平安末期以前の往来物との密接

な関係を窺うことができる。

一方、本作品の物語性については題名に即して考察され、鈴木一雄氏に次の発言がある。²⁾

消息文『よしなしごと』は、その内容がまた途方もないものである。大ぼら・でたらめの限りを尽した誇大な要求の列挙、羅列と、そのあとに示されるささやかな真の依頼と、——この二つの間の距離、落差からかもしだされる笑いが全面にあふれている。徹頭徹尾「よしなしごと」で押し通しているのである。そして、「途方もないでたらめ、誇大な要求の滑稽・冗談は、往来物のパロディ（もじり）であることを示す」として、

往来物のパロディとしての『よしなしごと』が、「小説」であること——「短篇物語」であることを拒否する理由はすこしもないといえるのである。やはり、『よしなしごと』は、血縁こそ濃いけれども往来物の系列からは逸れた、パロディを本質と

する短篇物語と見たい。

と論じられている。往来物の系譜を引きつつも「往来物のパロディ（もじり）」として「徹頭徹尾「よしなしごと」で押し通している」「『よしなしごと』」。こうして本作品は、そこに埋め込まれた「よしなしごと」において、物語としての表現性が見出されている。

以後、この「よしなしごと」論は、大槻修氏が「話芸の世界でも十分に通用するテクニク」を指摘し、塚原鉄雄氏が「古典作品に稀有のナンセンス表現」に着目するなど、より深く追究されている。

本稿では、こうした先行研究の驥尾に付き、往来物の系譜にある「よしなしごと」が物語表現として繰り広げる「よしなしごと」（パロディ、ナンセンス、話芸）の世界を、後述の通り本作品の創作と享受の環境の内にあつたとおぼしい『遊仙窟』を補助線に用いて、さらに掘り下げることとしたい。

なお、「よしなしごと」は書写者の発話、「師」僧の消息文の範囲などについて諸注釈書、諸論考でさまざまな見解が提出されている⁽⁶⁾。本稿では、「文のこぼれをかきと、書き写してはべるなり」似つかず、あさましきことなり。」以前を消息文書写者（語り手）による事態経緯・書写発意の解説と見なし、続く「唐土、新羅に住む人」以降末尾までを「師」僧から弟子の女に宛てた文の書写全文と解して考察する⁽⁷⁾。

二 『遊仙窟』と「よしなしごと」

—— 創作、享受の場の位相

日本における『遊仙窟』の受容は『万葉集』山上憶良「沈痾自哀文」（巻五・八九六）、空海『聲響指帰』序などによって確かめられる。特に『聲響指帰』序の「臨文味句、桑門、營動」の句は、『遊仙窟』が「よしなしごと」の登場人物でもある僧侶たちの中で読まれていたことを教えている。さらに、小島憲之氏以下の諸研究は、『遊仙窟』が『万葉集』歌、『伊勢物語』、『源氏物語』など多くの文学作品にモチーフを提供したことを明らかにしているが、「よしなしごと」についても、『遊仙窟』の受容を『玉造小町子壮衰書』の物尽くしに指摘する川口久雄氏が、「新猿楽記や堤中納言のよしなしごとや、桂川地蔵記上の食物尽しに展開するもの」としている⁽⁸⁾。

また、渡辺秀夫氏は『玉造小町子壮衰書』が平安末期、すなわち、「よしなしごと」の成立期にも広く受容されていたことを確かめており、寺本直彦氏は「よしなしごと」中の「めうこくかみしの信濃梨」が『遊仙窟』「燉煌八子之椽」句に由来するとして、同句を引用する『玉造小町子壮衰書』からの間接的受容も視野に入れた⁽⁹⁾。

「よしなしごと」は、単に「めうこくかみしの信濃梨」が「燉煌八子之椽」のもじりであるばかりでなく、列挙の手法や品種において、『玉造小町子壮衰書』（ないし『遊仙窟』）の影響が認

められる。

として、踏み込んだ見解を示している¹²⁾。

「よしなしごと」と『遊仙窟』との直接的な関係は確認しようのないことだが、『玉造小町子壮衰書』を含めた『遊仙窟』受容の環境が本作品の創作・享受の場でもあったことは、これらの先行研究の示唆するところである。

ところで、「よしなしごと」冒頭には「師」僧による弟子の女（人のかしづく娘）への物品無心状送付の話題に先だって、そのきつかけをなした「故だつ僧」の「人のかしづく娘」への無心と娘の応諾の一件が紹介されている。これについてはそこに両者の親密な関係を認め、僧侶の「破戒行為」を語ったものとするのが一般である¹³⁾。

作品の全体が僧侶の女性への関心を話題としているところから見ても妥当な見解と目されるが、他方、往来物の系譜に乗せて男女間の物の貸し借り、贈与を話題とする本作品は、それを通して恋愛と物の贈与、すなわち贈与物と贈与行為に物象化される恋愛関係を語る物語でもあって、冒頭の話題はその端緒を開く意義を担っている。この点に注意を向ければ、次の『遊仙窟』の一節はそうした物語モチーフが着想された回路を窺わせるものとして注目される。

昔日の雙眠^{たりのね}しは恒に夜の短きを嫌ひ、今宵の獨臥^{ひとりね}せるは實に更の長きを怨めり。一種の天公・兩般の時節、遙かに香氣を聞いて、獨韓壽が心を傷み、近く琴聲を聴きて、文君が面に對へる

に似たり。(漆山又三郎訳註『遊仙窟』、一六頁)

誘うかのような十娘の詩に応じて贈った張文成の書簡の一節である。張文成は、女性たちとの共寝の昔日と変わって夜長をもてあます今日の旅の独り寝のなか、香氣・琴声に十娘の面影を追ひ、その思いを韓壽・司馬相如の故事に託して表明する(傍線部)。このうち、「遙聞香氣、獨傷韓壽之心」は未婚男女私通の比喻典句「竊玉偷香」の故事にかかわる。それは『世說新語(惑溺篇)』、『芸文類聚』(卷三五・人部・淫等)にもあって著名なものだが、江戸初期無刊記本『遊仙窟』も当該句の雙行注(八丁オ・ウ)に引く『晋書』の賈充伝には次のようにある。

謚字長深。母は賈午、充の少女なり。父は韓壽、字德真、南陽堵陽の人、魏司徒暨の曾孫。姿貌に美たり、容止に善なり。賈充辟して司空掾と為す。充、賓僚と讌する毎に、其の女、輒ち青瑣の中より之を窺ひ、壽を見て焉を悦ぶ。其の左右に此人を識るや不やを問ふ。一婢有りて壽の姓字を説き、是れ故の主人なりと云ふ。女、大いに感想して、寤寐に發す。婢、後に壽家に往き、具に女の意を説き、並に其の女の光麗豔逸にして、端美絶倫なるを言ふ。壽、聞きて心動き、便ちに殷勤を通ずるを為さしむ。婢、以て女に白すに、女、遂に潜かに音好を修め、厚く相ひ結を贈り、壽を呼びて夕に入らしむ。壽、勁捷人に過ぎ

垣を逾えて至るに、家中知るもの莫し。惟だ、充、其の女の悦暢すること常日に異なるを覺えり。時に西域の奇香を買すること有り。一たび人に著くれば則ち月を経るも歇まず。帝、甚だ之を貴び、惟だ以て充及び大司馬陳騫にのみ賜ふ。其の女、密かに盗み以て壽に遣る。充の僚屬、壽と燕處するに、其の芬馥を聞き、之を充に稱ふ。是より充、意に女の壽と通ずるを知る。……遂に以て女、壽に妻す。

賈充の娘である賈午は覗き見た父の部下韓壽の姿貌容止に魅せられてひそかに通じ（波線部）、父と陳騫にだけ下賜された貴重な奇香を韓壽に贈る（棒線部）。その香の故に二人の私通は親の知るところとなるが、ついに許されて韓壽は賈午を妻とすることができたという。ここで興味深いのは、その韓壽と賈午の関係と所行が「よしなしごと」冒頭話題と相似形をなしている点である。「故だつ僧」の參籠の具を調達する「人のかしづく娘」は、奇香を韓壽に手渡す賈午と同様、「私通する男のために親の財を密かに与える」娘である。韓壽・賈午の未婚男女私通「偷香」故事は、無刊記本『遊仙窟』雙行注に紹介されるところから見て、『遊仙窟』受容の場でも知られた話題であっただろう。となれば、「よしなしごと」の冒頭の一件は、こうした『遊仙窟』受容の環境の中で、これを破戒僧の所行へと移しかえるパロディ＝翻案（韓壽↓「故だつ僧」、賈午↓「人のかしづく娘」、「奇香」↓參籠具）として着想されたとの推測を導く。

さらに、韓壽を自らに重ねるのが『遊仙窟』の張文成であることを考えると、『遊仙窟』受容の環境の中では、「よしなしごと」の「故だつ僧」は韓壽を経て『遊仙窟』の張文成に比定され、「故だつ僧」と「人のかしづく娘」との関係は『遊仙窟』の張文成と十娘の恋に見立てられることになろう。「よしなしごと」はそのようにして贈与の物語の端緒を開き、この張文成の面影をそなえる「故だつ僧」との対比において、羨望、嫉妬の情に駆られてこれをまね、弟子の女（人のかしづく娘）への無心に及んだ老いた「師」僧をこそ主題化する。そして、その無心の消息文の「よしなしごと」ぶり（似つかず、あさましきことなり）を、「書きてありける文のことばのをかしさに、書き写してはべるなり」と事実化しつつ披露していくことになる。

いささか憶測を重ねる議論になったが、以上は、接点を想定しうる『遊仙窟』受容の環境を補助線とした時に浮上する解釈である。以下、本作品の中心話題たる「師」僧の行状、無心の言葉について、これを用いて読解を試みることにしたい。

三 仙界への志向―張文成と「師」僧

「よしなしごと」の「師」僧については、小峯和明氏が、「故だつ僧」に対する「隣の翁」とみなしている。そして、それを作品の構想と認め、「隣の爺」型のもどき」との作品理解を示す。¹⁸ たしかに、枠

組みは「もの羨み」を誡める「隣の爺」型である。しかし、指摘されるような「故だつ僧の成功に対する師の僧の意図的な失敗」を語るものとはいえない。なぜなら、「師」僧の消息文の結果については書かれていないからである。「隣の爺」型のもどき」は完結しないままに閉じられている。

「隣の爺」型のもどき」が完結しないのは、それが見せかけの構図だからである。「よしなしごと」は「隣の爺」型をもどきながら結末を語らず、「隣の翁」の行状の「よしなしごと」をこそ主題化する。それは同じく『堤中納言物語』に収載された「虫めづる姫君」と同様である。

この物語における「隣の翁」の行状の「よしなしごと」とは、例えば次のようなことである。

「師」僧は、「際高く思ひ立」った出奔後の居住地について「雲の上に響きのほりて、月日の中にまじり、霞の中に飛び住まばや」と「人のかしづく女」に告げる。小峯氏はこれについて同論文で「書き進める内、書き手の想像の翼がはばたきはじめる様がありありと見えてくる。」と述べる。そして、出立所を「科戸の原の上の方に、天の川のはとり近く、鵲の橋詰」としている点についても、

棲の願望がついには昇天飛行に転回するのだ。しかし、それは書き手である僧の想像力の飛躍にはかならない。僧が現実に行へないことは明白であり、故だつ僧への対抗意識がそうし

た大げさな発想はごくんだこともまた明らかであろう。

として、そこに本作品の「飛行譚や発心遁世譚のもどきという性格」を読み込んでいる。消息文の筆者である「師」僧の「想像力」に作者の「想像力」を重ね、「飛行譚や発心遁世譚のもどき」のモチーフを見出した論だが、羽ばたく「想像の翼」、「想像力の飛躍」、「大げさな発想」が「対抗意識」に根ざすとすれば、それは「よしなしごと」と呼ぶほかないものであろう。

しかし、ここに見出される「よしなしごと」はそればかりではない。

「師」僧は消息文中に、現在のありかを「雲の上に響きのほりて、月日の中にまじり、霞の中に飛び住む」ための出発地、「科戸の原の上の方」、「天の川のはとり近く」「鵲の橋詰」と伝えている。そして、すでに「大空の陽炎」「海の水の荒十」²⁰なる二人の護法童子を使役する身と称してもいる。

これについて、三谷邦明氏は「この老僧の書簡は、この本文の中では異郷からの手紙として位置付けられている」とする。また、井上新子氏は、「師」僧消息文末尾「風の音、鳥のさへづり、虫の音、浪うち寄せし声に、ただ添へ侍りしぞ」に語られる音声を「法を説き明かす声としての機能を備える」とし、「経文にその源流を持つ極楽の点景としての「風」・「鳥」・「波」の音」だとしている。²¹

「師」僧は「異郷」「極楽浄土」を想起させる世界として自らのあ

りかを宣言する。けれども、そこは厳密に言えば「異郷」「極楽浄土」ではなく、そうした世界「雲の上」「月日の中」「霞の中」に「飛び住む」ための出発地、すなわち境界としての「科戸の原の上の方」「天の川のはとり」「鵲の橋語」である。

「科戸の原」は風神のいる原であり、消息文の末尾に「風の音」とあるのはその風神の吹き送る風の音。同様に、「浪うち寄せし声」は「天の川」、「鳥のさへづり」は「鵲」にかかわるはずである。そして、「科戸」の風は、「六月晦大祓」に唱えられるように「天つ罪」、「国つ罪」を吹き祓う風であることを考えると、「師」僧は天地の境界にあり、そこから祓いの風に添えて消息すること、「弟子」たる「人のかしづく娘」の罪を救うとしてるのである。護法童子の名に「空」「海」が含まれるのもこの境界性に関わっているよう。

「際高く」異郷を志向して天地、空海の境界に至り、護法童子を使役し、弟子のために祓いの風を吹き送る私。こうした「師」僧の自己像自体「よしなしごと」と称するほかないものだが、その「想像の翼」「想像力」には『遊仙窟』との親縁性がある、彼が目指す世界および居留地は『遊仙窟』の「神仙之窟宅」やその途上の地に類比的な場所である。『遊仙窟』冒頭には次のようにある。

若し夫れ積石山は、金城の西南に在り、河の經る所なり。書に

云ふ、河を導く積石より龍門に至ると、即ち此の山是れなり。

僕、汗隴に従つて使ひを河源に奉はり、運命の逆適たるを嘆き、

郷關の渺邈たるを歎く。張騫の古迹は十萬里の波濤にして、伯禹の遺蹤は二千年の坂險なり。深谷地を帶らし、崖岸の形を鑿もて穿ち、高き嶺天に横はりて岡巒の勢ひは刀して削れるがとし。煙霞子細にして泉石分明なり。實に天上の靈奇にして乃ち人間の妙絶たり。目にも見ざる所・耳にも聞かざる所なり。

日晩れ途遙かにして、馬疲れ人乏みぬ。行いて一つの所に至るに、險峻きこと非常にして、向上れば則ち青壁の萬尋なる有り、直下せば則ち碧潭の千仞なる有り。古老相ひ傳へて云ふ、此れは是れ神仙の窟なり。人跡及ぶこと罕にして、鳥の路纒かに通ふ、毎に香しき菓、瓊の枝有り、天衣錫鉢、自然と浮かび出づ。何れよりして至れるを知らず。余乃ち端み仰ぎて心を一にし、潔齋すること三日、細葛に緣り、輕舟にして泝れり。身躰飛ぶが若く、精靈夢みるに似たり。須臾の間に、忽ち松柏の巖・桃華の澗に至る、香風地を觸りて光彩天に遍し。一の女子水の側に向つて衣を洗ふを見る。余乃ち問うて曰く、「承はり聞く、此の處に神仙の窟宅有り」と、故に來りて伺候へり。山川阻隔たりて疲れ頓むこと異常はなはだし。娘子に投りて片時く停まり歌まんことを欲ふ。交情を惠み賜はらんことの幸ひに聽許しを垂れよ」と。……(同上、一三—一四頁)

隴州を経て河源郡に使いする張文成は深谷・崖岸・高嶺・岡巒の景に感嘆の声を挙げつつ「神仙窟」を望む「一所」にたどり着き、

そこで「端仰一心、潔齋三日」、ついに「神仙之窟宅」に至る。「一所」に至る景観は「天上之靈奇」「人間之妙絶」と評される。まさに天上・人間の境界地だが、「よしなしごと」の「科戸の原の上の方」「天の川のはとり」「鵲の橋詰」はこの類だろう。また、張文成は「身拏若飛、精靈似夢」の験を得て「神仙窟」に到達したという。これも「師」僧の願う「雲の上に響きのぼりて、月日の中にまじり、霞の中に飛び住む」に類比的である。さらに、古老の相伝にいう「天衣錫鉢」。江戸初期無刊本『遊仙窟』雙行注は「天衣ハ仙衣也。昔人有リ、廬山ニ入りテ一リノ道僧ヲ見テ與ニ語ル。応（ゼズシテ）錫（ヲ）振（リ）雲（ヲ）凌（ギテ）去ル也。」（原漢文、三丁オ、丸括弧内は補説）と記す。「師」僧はこの「道僧」たらんとしたことだろうか。

『遊仙窟』では、張文成が十娘のエクボを「醫疑織女留星去（織女の星を留めて去くかと疑われ）」（同上、一九頁）と歌い、十娘も自ら「星留織女、遂處人間（星の織女を留めて遂に人間に處り）」（同上、四〇頁）と張文成に応じている。すなわち、十娘は織女に、その「神仙之窟宅」は織女の棲になぞらえられるわけだが、「よしなしごと」の創作と享受の場が『遊仙窟』受容の環境と重なることすれば、「天の川のはとり近く」「鵲の橋詰」もこれに関わるがごとくである。

「師」僧は「雲の上」「月日の中」「霞の中」の「神仙之窟宅」を目指す。それは「人のかしづく娘」と私通する「故だつ僧」が韓壽、ひいては『遊仙窟』の張文成に重なるって見えたから、ということであろう。

そして、「故だつ僧」を、したがって張文成をもどく彼もまた、織女たる十娘に「人のかしづく娘」を求めて「天の川のはとり近く」「鵲の橋詰」に辿り着く。「師」僧の「想像の翼」「想像力」と『遊仙窟』世界との親縁性とはこのようなことである。

織女を求めて羽ばたく「師」僧の「想像の翼」。しかし、その欲望は消息文冒頭に表明される厭世観（際高く思ひ立ちてはべる」と末尾の装われた気遣い（聞くことのあるしに、いかに、いかにとおぼえしかば））によって取り繕われ隠される。「師」僧はあくまでも「女の師にしける僧」として、もしくは「道僧」として、消息文を「故だつ僧」との恋の罪を祓う「科戸」の風に乗せて送るのである。

「故だつ僧」への羨望、嫉妬に駆られて「山寺」ならぬ「神仙窟」を目指し、『遊仙窟』の十娘に弟子の女を重ね、しかもなお厭世観を表明しつつ「女の師にしける僧」としての体面を保とうとする「師」僧。「よしなしごと」はそうした「隣の翁」を主題化し、その宙づりになった欲望の「よしなしごと」を描き出していく。

四 言葉の戯れ—増殖する言葉

次に、「師」僧の消息文について検討する。その消息文が無心状、いわば「往来物もどき」としてあり、注文の品々の列挙の仕方に「笑いのために様々な技法」が用意されていることは、諸論考に指摘されている。そこで「言葉遊び」「物の名の祝祭」とも称される無心

の実際は、小森潔氏が指摘しているとおり、「生存という現実的レベルにおけるものではなく、「故だつ僧」の「筵、疊、鹽、半挿」という、きわめて常識的な要求との差異を明らかにせんがために」、「師」僧が「非常識な言葉を尽くしたものであった。それらの〔物〕は実体ではなく、「記号」として、いわば、「誘惑のゲーム」のなかでの「言語による窮極的なゲーム」において自己増殖し連ねられて⁽⁵⁾いる。

同様のことは『遊仙窟』においても認められることであって、次はその一例である。

少時にして飲食俱に到る。熏香室に満ち、赤白前に兼はる。海陸の珍羞を窮め、川原の菓菜を備ふ。穴は則ち龍肝鳳髓、酒は則ち玉體瓊漿、城南雀噪の禾、江上蟬鳴の稻、雞の臘雉の臠、鼈の醢鶉の羹、椹下の肥豚、荷間の細鯉、鵝子鴨卵銀盤に照輝し、麟脯豹胎玉疊に紛綸たり。熊の腥純白く、蟹の醬純に黄なり。鮮き鱸は紅の縷と輝を争ひ、冷なる肝は青き絲と色を亂る。蒲桃・甘蔗・榎棗・石榴あり。河東の紫鹽、嶺南の丹橘、敦煌の八子の棗、青門五色の瓜、太谷張公の梨、房陵朱仲の李、東王公の仙桂、西王母の神桃、南燕牛乳の椒、北趙雞心の棗、千名萬種にして具に論ふべからず。(同上、三〇～三二頁)

十娘が張文成を招待する場面、その宴会に出てくる飲食品を列挙した部分である。テーブルの上に乗せられた品物は、大きく言え

ば、実在の品物・名産品、架空世界の物品の二種類である。傍線部は後者に属するもので、ここでは、龍肝鳳髓(想像上の動物である龍・鳳の肝・髓)・玉體瓊漿(伝説上の仙薬、仙人の飲料)・雀噪之禾(長安城南方の銅雀が熟せしめた五穀。一度啼くと成長し始め、二度啼くと熟するという)・麟脯(想像上の動物である麒麟の乾肉)・東王公之仙桂(月の桂の寒・西王母之神桃(三千年に一度生る桃)が掲げられている。それらは、実体を超えた「記号」に過ぎない。言い換えれば、現実と対応しない、言葉だけが自立するような世界が、ここでも構築されているのである。

また、言葉や物品が対偶関係によって並べられている点も「よしなしごと」との類比を考える上では重要であろう。海陸と川原、穴と酒、城南と江上、銀盤と玉疊、河東と嶺南、紫と丹、白と黄、紅と青、八子と五色、梨と李、東王公と西王母。あるいは、東・西に南・北が続くように、ある言葉が他の言葉によって引き出され、言葉が言葉を生み出していく事態が、ここでも確かめられる。

このような『遊仙窟』の言葉の世界を知る者は、「よしなしごと」の無心状の「言葉遊び」「物の名の祝祭」を『遊仙窟』に重ねながら受容したであろう。「記号」としての言葉による「窮極的なゲーム」は、実体としての〈物〉の世界を逸脱しているという意味で、言語表現における「よしなしごと」である。「よしなしごと」の作者は、それを『遊仙窟』受容の世界で学び、本作品に仕掛けたのではなかつ

たか。

ところで、このような言葉の自己増殖に笑いを仕掛けて「よしなしごと」を仕組む本作品の「師」僧の消息文は、新日本古典文学大系の作品解説その他が指摘するとおり、無心の品の一々を「最初は超高級品を要求する誇大な話から、最後はレベル・ダウンして粗悪品でも我慢する」といった形で列挙する。鈴木一雄氏のいわゆる「往来物のパロディ（もじり）」、小峯和明氏の「往来物もどき」とは、これらの間の落差に着目してのことである。

さらに、このもじり・もどきの無心の結末が、

いでや、いるべき物ども、いと多くはべり。せめては、ただ、足鍋ひとつ、長筵ひとつら、鹽ひとつなむるべき。もし、これら貸したまはば、こころならむ。

となつている点も重要であろう。それは、それまでの品々の列挙そのものを無意味化する。「よしなしごと」の「よしなしごと」は「ここにも指摘できるわけだが、加えて、この最後に示される無心の品々が結局は「故だつ僧」の手に入れた品々（「旅の具に、麴、貴、鹽、半挿、貸せ」と言ひたりければ、女、長筵、何やかや、一やりたりける。）とほぼ重なる（傍線部）ことは、厭世観の表明から始まったこの消息文が「故だつ僧」への「もの羨み」に端を発し、その羨望、嫉妬を隠しつつなされたものであったことを教えている。「隣りの翁」型の物語類型との関連が指摘されるのもこれによるが、大仰に物の名を列挙す

る消息文が「もの羨み」という隠微な欲心に支えられそこに帰着していくところに、本作品が創り出した「よしなしごと」を読み取り、手を打つ読者も多かったであろう。「もの羨み」とは無縁な『遊仙窟』と対比する読者においては、それはなおさらのことである。

五 言葉に潜められる性の匂い

「師僧」の消息文に仕組まれた「よしなしごと」として、今一つ指摘できるのは、品々を列挙する言葉の多くに性の匂いが籠められていることである。これについては小峯和明、井上新子、三谷邦明の諸氏諸論考に詳しい。

富士の嶽と浅間の峰とのさま・かまど山と日の御崎との絶え間²³・白山と立山とのいきあひの谷・愛宕と比叡の山との中あひ小峯和明氏は右について『梁塵秘抄』などでなじみの修験の山々だが、山々の「はさま」「絶え間」「いきあひの谷」「中あひ」をもち出すところに特異性があり、「人のたはやすく通ふまじからむところ」に籠りたいという文脈を重ねて、女の陰部を想像させる」とする。三谷邦明氏は、「やもめのわたりのいり豆」について、「寡婦の「わたり」にある煎り豆というのは、明らかに老女の女陰を意味しているはずである。この食欲から性欲への見事な変換は、それだけで笑いを誘うのだが、同時にふと老僧が深層的に隠していた無意識的な欲望を漏らしてしまったとも読める」とする。

さらに、これらを追認する井上新子氏は、「玉江に刈る真狐」^②「逢ふこと交野の原にある菅狐」「十布の菅狐」「七条の縄筵」「筑摩の祭に重ぬる近江鍋」「楠葉の御牧に作るなる河内鍋」を取り上げて、「書簡の文言には、表層における品物の無心という意味の層の底に、「故だつ僧」と娘の關係への揶揄や皮肉、娘への挑発、女性の所望といった師僧の屈折した欲望が隱微に塗り込められている」とする。そして、「こうした食品を取り上げつつ、一挙に猥雑な笑いがしかけられている。ここまで焦り続けてきた師僧の欲望が下卑た露骨な挑発となって爆発したと捉えられよう。」と述べている。

これらについて、三谷氏は「品物を列記するという物欲と共に、この僧は何時のまにか老女を犯しているのである。女戒を犯すことを諷める書簡が、女戒を違反するという笑いがある」とするが、これを、厭世観の仮面の下に潜められた「師」僧の抑えきれなかった性愛への欲望の発露とみれば、これらは「師」を装いつつ装いきれなかった「僧」の「よしなき」行為として用意された表現といえよう。ところで、こうした性を匂わせる表現は、『遊仙窟』になじみのものでもあった。次に挙げるのはその一部である。^③

張文成「刀子」詠（同上、三三頁）

自憐膠漆重（自ら憐む、膠漆の重んずべきを）

相思意不窮（相ひ思うて意窮まらず）

可惜尖頭物（惜むべし、尖頭の物）

終日在皮中（終日、皮中に在るを）

十娘「鞞」詠（同右）

數捺皮應緩（數皮を捺さば應に緩うすべし）

頻磨快轉多（頻りに磨さは快轉多からん）

渠今拔出後（渠今拔出して後）

空鞞欲如何（空鞞を如何とか欲る）

これは張文成・十娘が物によせて詩を作りつつ戯れる場面でのもので、張文成が刀を男性性器に譬え、十娘が鞞を女性性器に見なして、きわどい応酬をはたす。中華書局版『遊仙窟校注』は男女が戯れる「詭語」、明らかな「色情隱喻」が仕込まれているとする。^④このほか、男性器を「筆」、女性器を「硯」に見立てる張文成「筆硯」詠に、十娘が女体を「鴨頭鑰子」（鴨首をあしらった足鍋）に見立てて応ずる例もある（同上、三五三六頁）。『遊仙窟』受容世界で「よしなしごと」を創作し、享受する人々にとっては、「師」僧の欲望を潜ませた言語遊戯は『遊仙窟』でなじみの「よしなしごと」でもあった。

六 おわりに

以上、『堤中納言物語』「よしなしごと」を『遊仙窟』の受容世界に描き直して、読解を試みた。ここで論じた本作品の「よしなしごと」を『遊仙窟』の日本における受容、大きくは「翻訳」と考えれば、東アジアの漢文化圏における文化接触とそこからの展開の一

事例として扱うことも可能であろう。こうした点についても、今少し「翻訳」諸事例の検討を進めるなかで考えていきたい。

注

- 1 稲賀敬二「よしなしごと」作品解説（新編日本古典文学全集『落窪物語・堤中納言物語』二〇〇〇年九月、小学館）による研究史概観、参照。特に、山岸徳平・土岐武治説の紹介部分。
- 2 寺本直彦「堤中納言物語「よしなしごと」は平安後期の成立か―『和泉往来』との関係など」『青山語文』11、一九八一年三月。
- 3 鈴木一雄「よしなしごと」『堤中納言物語序説』Ⅲ・『堤中納言物語』覚書（一）(0)、一九八〇年九月、桜楓社。
- 4 新日本古典文学大系『堤中納言物語・とりかへばや物語』（一九九二年三月、岩波書店）「よしなしごと」作品解説。
- 5 新潮日本古典集成『堤中納言物語』（一九八三年一月、新潮社）「よしなしごと」作品解説。
- 6 井上新子「よしなしごと」の〈へ聖〉と〈俗〉と『国文学攷』一七〇号、二〇〇一年六月。同氏「堤中納言物語の言語空間―織りなされる言葉と時代」Ⅱ第五章、二〇一六年五月、翰林書房、所収、参照。
- 7 「よしなしごと」の本文引用は注1に拠った。
- 8 引用は日本古典文学大系『三教指帰・性霊集』（一九六五年一月、岩波書店）による（傍点は私意。以下同）。なお、小島憲之「漢籍の受容―唐代小説『遊仙窟』の場合」『国語国文』三六・九、一九六七年九月、馬興国『遊仙窟』在日本的流伝と影響』（『日本研究』、遼寧大学日本研究所、一九八七年四月）、参照。
- 9 ○『万葉集』…卷五・八五三大伴旅人「遊於松浦河序」、卷五・

八九六山上憶良「沈痾自哀文」、卷六・九六二左注、卷十二・二九一・二九一四、卷十三・三二七三、卷十六・三八二四左注・三八三四・三八三五・三八三七左注（注8小島氏前掲論文、土橋寛「遊仙窟と万葉集―三八三四の歌について」『万葉』3、一九五二年四月）、吉永登「憶良の手法と遊仙窟」『国文学』32、一九六二年三月、迫徹朗「万葉集に見える遊仙窟模倣歌についての再吟味」『熊本女子大学学術紀要』10・1、一九五八年三月など。

○『源氏物語』…若紫巻、絵合巻、蜻蛉巻（丸山キヨ子「源氏物語・伊勢物語・遊仙窟―わかむらさき北山・はし姫宇治の山荘・うひかうぶりの段と遊仙窟との関係」『日本文学』16、一九六二年三月、新聞一美「源氏物語と唐代伝奇―基層としての遊仙窟」『和漢比較文学』44、二〇一〇年二月）、三角洋一「源氏物語講座 蜻蛉巻の末尾部分と『遊仙窟』〈むらさき〉47、二〇一〇年二月」。

○『伊勢物語』…初段（上記、丸山氏論文）

このほか、『遊仙窟』の訓読が日本語の語彙に影響を与えたとされ、契沖も『万葉集』の訓に参考とした。なお、『遊仙窟』についての先行研究には上掲論考のほかにも、小島憲之「上代日本文学と中国文学」中（一九八六年、塙書房）、白木直也「遊仙窟について」『支那学研究』6、一九五〇年一〇月、魚返善雄「詩歌鈔と小説のみぎわ―『遊仙窟』研究に寄せて」『短歌研究』八・8、一九五一年八月、近藤春雄「遊仙窟について」『愛知県立女子短期大学紀要』5、一九五四年三月、長田夏樹「遊仙窟」の成立に関する一考察（『神戸外大論叢』五・2、一九五四年三月）、近藤春雄「遊仙窟について」『国語国文』三六・9、一九六七年九月）等がある。

10 川口久雄（『三訂』平安朝日本漢文学史の研究』中、十五章（初版一九五九年三月、三訂一九八二年九月、明治書院）。

- 11 渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』第四篇第二章（一九九一年一月、勉誠社）。
- 12 寺本氏、注2前掲論文。
- 13 三谷邦明「物語文学の極北―堤中納言物語『よしなしごと』の方法あるいは終焉の祝祭」、『横浜市立大学論叢』37、一九八六年三月。「物語文学の方法II」(一九八九年六月、有精堂)所収など。
- 14 『遊仙窟』の本文引用、書き下し文は漆山又三郎訳註『遊仙窟』(一九四九年、岩波文庫)により、適宜、今村与志雄訳『遊仙窟』(一九九〇年、岩波文庫)付載の醍醐寺藏古鈔本影印、藏中進編『江戸初期無刊記本遊仙窟』(一九七九年八月、和泉書院)を参看した。以下同。
- 15 注14岩波文庫(今村与志雄訳)訳注は本故事の梗概を古伝の『世説新語』惑溺篇によって紹介するが、江戸初期無刊記本『遊仙窟』は雙行注に『郭氏』(『太平御覧』巻九六一・香、所引に同)『晋書』を引いている。但し、無刊記本雙行注の『晋書』は「其女密盗以遺壽」を持たない別伝を引くので(注14岩波文庫〈漆山又三郎訳註〉に訓読文が紹介されている)、ここではより詳細な中華書局標点本『晋書』巻四〇、列記第一〇の本文を書き下して引用する。なお、『藝文類聚』巻三五・人部・淫は臧榮緒『晋書』本文を引く。
- 16 物語冒頭部でのごうした対比構造設定の方法は、『堤中納言物語』所収「虫めづる姫君」においても採用されている。
- 17 「師」僧と弟子の女(「人のかしづく女」との関係は、『宇治拾遺物語』第60話「進命婦、清水寺へ参る事」の、八十歳の清水寺僧がこれを師と仰ぐ進命婦に恋慕する一件と類似のものであろう。
- 18 小峯和明「よしなしごと」(三谷榮一編『体系物語文学史 第三巻』一九八三年七月、有精堂、所収)。
- 19 注1、新編日本古典文学全集の頭注による。
- 20 三谷氏、注13前掲論文。
- 21 井上氏、注6論考。
- 22 注4、新日本古典文学大系・脚注に「風神の綾長戸辺命がいる原。」とある。
- 23 十娘の「星留織女、遂處人間」について、注14漆山又三郎訳註『遊仙窟』は「爰は十娘自ら天漢の織女・月中の姫娥に比喩し、聊か誇言して調戲せるなり。」と注している。一三一頁。
- 24 小峯氏、注18前掲論文では、「往来物もどき」の具体が「僧の注文がその実現を拒む点、往来物の本質である実用性や啓蒙性を全く無効にさせる点」、「上等なものをあげつらつてきて、最後に下等なものへ逆転させてしまう表現の構造」「求めえないものに尻上りに比重が移っていく例」などに見る「逆転・対比の美学」において指摘される。そして、これを『堤中納言物語』の特性に通ずる「ことば遊び」「物の名の祝祭」と評し、「僧の注文は、総じて『竹取物語』におけるかぐや姫の五人の貴公子への無理難題にも匹敵するもので、一方は永遠に天上の人となったが、他方は天がけることを欲しつつ地上にうづくまり、文の中に己れを解放するだけであった。」と結んでいる。三谷氏、注13前掲論文も、「せめては浦島の子が皮籠にもまれ、その皮袋まれ、貸し給へ」を「玉櫛篋」ならぬ「皮籠」、「火鼠の皮袋」ならぬ「鼠貂の皮袋」の無心とみて、同様の「逆転・対比」を認めている。また、修行地の列挙に「日本の地名から中国・インド、更には天上界へと拡大・誇張していく技法」、物の列挙に「縮小卑下していく技法」を指摘して、「この本文は笑いのために様々な技法を動員しているのである。」と述べている。
- 25 小森潔「ゲーム―言語ゲームとしての『堤中納言物語』『よしなしごと』」(物語研究会『物語とメディア 新物語研究1』(一九九三年、有精堂)所収)。
- 26 「かまど山と日の御崎との絶え間にまれ」の「かまど山」は諸注に筑前国

- 歌枕「宝満山」のこととするが出雲の韓龜のことか。韓龜は『梁塵秘抄』
 二九七「聖の住所は何処何処ぞ、……出雲の、鰐淵や、日の御崎。……」
 に名が出る鰐淵近在の修験の地で、中腹に韓龜神社が現存する。
- 27 小峯氏 注18前掲論文。
- 28 三谷氏 注13前掲論文。
- 29 井上氏 注6前掲論文。
- 30 『遊仙窟』後半の張文成・十娘の詩の贈答について、注14漆山又三郎訳註
 『遊仙窟』は「附言。此詩より漸く俄にわたり來れり。讀者察知せよ。」と
 記す（六七頁）。
- 31 『遊仙窟校注』（李時人・詹緒左校注、中華書局、二〇一〇年）。

——ぎ・ひょうひょう、広島大学大学院教育学研究科博士課程後期在学——